

北米の宗教共産體

井 藤 半 彌

アメリカの宗教共産體として有名なアマナ組合は、一八三二年に八十年餘の共産生活を中止して株式會社に改組したが、このことは學界ではあまり注意されてをらぬやうだ。その後に出たヨーロッパの文獻でも、共産生活が依然續行されてゐるやうに傳へるものがある。一九四〇年出版の K. Diehl, *Der Einzelne und die Gemeinschaft*, 1940, S. 154 f. の如きはその一例である。私はアマナ共産組合の成立發展の歴史、終焉の事情について、數年來多大の關心をもつて調査してゐたが、最近「アマナ共産體の生成と終焉」と題する拙文（國家學會雜誌二十三年八月號及び九月號）でこれをまとめ、ややくはしく説明した。アマナ組合の研究をすすめてゐるうちに、他の小共産體、ユートピア社會主義の實驗に關する種々の事實が明かとなつてきたので、ここでその一部をまとめてみた。

ユートピア社會主義の實驗その他の小共産體は、その設立の動機によつて區別すると二種となる。その一は宗教上の信仰によるものであつて、これを假に宗教共産體といふ。アマナ組合等はその例である。その二は人民厚生の増進

その他經濟生活の向上を目的とするものであつて、これを經濟共產體といふ。例へばオウエンやフリーエ自身又はその同志によつて十九世紀につくられた新しい村がそれである。これらの宗教及び經濟小共產體は、多くは數十人乃至數千人程度の人々によつて主としてアメリカ合衆國の田舎でつくられた。ブッシーの論文「合衆國における共產主義組合」(一九〇五年「政治科學四季報」六六一—六六四頁)によると、十八世紀及び十九世紀に同國內でつくられた各種の共產體の數は合計百七である。このほかにヨーロッパ諸國、南米のパラグアイ、ブラジル、ヴェネズエラ等につくられたものもあるが、その數は少い。この建設地として主としてアメリカがえらばれたのは、(一)同國でつとに認められてゐた政治、宗教等の自由の魅力があつたこと、(二)舊秩序の悪影響をうけないところで、廣大な土地が低廉な價格で容易に入手しえたこと等の理由による。

この稿では上記二種の共產體のうちで、宗教共產體のみについて述べようと思ふ。經濟共產體については近い將來に稿を改めて解説する。これ等のものは社會主義運動史上必ずしも重大な意義あるものではなく、現在ではむしろ好奇心の對象となることも多いが、しかし、これより社會的政策の樹立について若干の教訓を汲みとることもできるのである。

この稿を起草するについて使用した主たる文献は次の通りである。

- (1) J. H. Noyes, *History of American socialism*, 1870.
- (2) C. Nordhoff, *The communistic societies of the United States; from personal visit and observation*, 1875.

(3) R. Liefmann, Die kommunistischen Gemeinden in Nordamerika, 1922.

この三者は、著者自らが多くの共產體につき現地訪問その他の方法で調査したその成果である。

(1)は A. J. Macdonald が北米共產村につき一八四二年より五四四年までの間に實地見聞、照會狀等の方法で蒐集した資料遺稿を基礎とし、これにノイスの調査を加へたもの。ノイスは、本稿でも述べるように、オネイダ共產體の指導的人物であり、この書物も同共產體内で作成され印刷された。ややまとまりの悪いものであるが、この方面に關する最初の文獻として重要である。(2)は(1)に比して詳細に説く興味ふかき書物。つぎの共產體その他について説明する。エホニミー、ソブ、シェーカー、マmana、オネイダ、ベッセル、オーロラ、イカリマ等。(3)は二十世紀初期に北米の宗教共產體、ことにマmana組合を訪問して研究した成果である。これを中心とするが、他の諸團體についても論及してゐる。

(4) M. Hillquit, History of socialism in the United States, 5. ed., 1910.

(5) K. Liefmann, Geschichte und Kritik des Sozialismus, 1922.

(6) F. A. Raushe, Communistic societies in the United States, (Political Science Quarterly, vol. 20, 1905, 掲載)

(7) K. Diehl, Ueber Sozialismus, Kommunismus und Anarchismus, 3. Aufl., 1920.

(8) D. W. Douglas and K. du Pre Lummkin, Communistic settlements. (Encyclopaedia of social sciences, ed. by Seligman, vol. 3, 1937, 掲載)

これ等のものはすべて第一次的資料による研究ではないが、各種小共產體の概要を知るのに便利である。なほ Wil-

北米の宗教共產體

Ian A. Hinds, *American communities and co-operative colonies, 1908.* が好研究書であるが、遺憾ながら繙讀の便宜が得られなかつた。なほ、これ以外の外國文獻、ことにアマナの研究書については既掲拙文を参照されたい。

(9) 矢島悦太郎「概説社會思想史」(昭和二十四年)に古代、中世、近世の宗教共產體に關する研究がある。取扱はれてゐる問題範圍もひろく、その大綱を簡潔につたへる好著である。

二

宗教的動機による共產生活は、東洋及び西洋における各種の宗教の間で常にみるところである。このうち最も重要なものはキリスト教徒のそれである。キリストの教義が元來共產主義を是認するものかどうかについては異論がある。しかしイエスの教の中に私的富を輕視し經濟上の差別を非難する側面があつたことは事實であつて、その發生當初、異教徒の間ではキリスト教を共產主義的と解するものがあつたのである。また一部の原始キリスト教徒の間では、既にこれが實行されてゐた。ことに中世以來修道院で純法律的共產主義——財産を共有とするが、經濟の共同はなく經濟は外部の有償労働者によつて實行されるもの——が實行されることが多かつた。かかる共產生活は近代の社會運動に直接大なる影響を與へたといへぬ。しかし共產主義思想が、現實の社會でまづ實行に移されたのが、主としてキリスト教徒の間であり、彼等が共產主義をかかゝる形式で二千年の長期にわたつて温存した事實は注目に値ひする。

キリスト教共產體は中世紀末期以來各地で發生した。そのうち重要なものは、十六世紀のドイツの再洗禮派及びこの影響のもとに十六世紀に生まれ二十世紀まで存続するフイター團、一六一〇年より一七六八年までブラクワイの

ジェズイットを中心とする同地原住民の共産團體、十七世紀末より十八世紀十九世紀を通じて北アメリカでつくられた多くの共産體である。このうち再洗禮派、フーター團、パラグアイの共産體については、前掲拙文(八月號三十四頁)でも略述した。ここでは北米のキリスト教共産體のみについて述べる。

三

アメリカの宗教共産體の大部分はドイツ人によつて、特殊な宗教觀を基礎としてつくられた。その古い例をあげると、一六八〇年にメリーランド州の北部でプロテスタントの神祕派の人々がつくつた *Labadist Community* 一六八四年にペンシルヴェニア州でつくつた *Frau in der Wildnis* がある。しかし兩者ともに短命であつて、永くはつづかなかつた。この最盛期ともいふべきは、十八、十九兩世紀、ことに十九世紀の前半であつた。この二世紀の間に生成した宗教共産體を表示すると次の通りである(前掲一九〇五年のブッシーの論文六六一―六六四頁による。二十世紀の當初に作成されたものであつて、いふまでもなく、その後の變化は顧慮されてをらぬ。「人数」は當該共産體の終止期または二十世紀初期のものを示す)。

名	稱	設立年	場所	人数	終止年	終止原因
Ephrata		1732	Penn.	17		
Jerusalem		1786	N. Y.	—	1820	指導者の死亡
Shakers		1787	9 州	1,000	—	—
5.	Harmonists	1803	Penn.	5	—	—

北米の宗教共産體

一 聖徳教 卷第十一 聖 田・火 鷲

Separatists	1817	Ohio	222	1898	個人主義
Snowhill	1820	Penn.	30	?	?
Hopedale Community	1841	Mass.	175	1858	経営不良、成員貧弱
Amarna	1843	N. Y., Iowa	1,800	—	—
Mc Kean Co. Ass.	1843	Penn.	多数	?	?
Peace Union Settlement	1843	Penn.	?	1844	?
Bethel	1844	Mo.	1,000	1880	指導者の死亡
Bishop Hill Community	1846	Ill.	1,000	1862	指導者の死亡、経営不良、信仰上の不和
Oneida	1848	N. Y.	268	1881	外部よりの反対
Mountain Cove	1851	Va.	?	1853	財産上の紛争
Wallingford " (Oneida の分派)	1851	Conn.	38	1851	Oneida 参照
Aurora	1856	Ore.	350	1881	指導者の死亡
Celesta	1861	Penn.	20	1864	場所不良、指導不良、不和
Adonai Shomo	1861	Mass.	30	1896	成員の脱退、指導不良
Blockton Community	1867	N. Y.	70	1880	指導者間の紛争
Fountain Grove	1875	Cal.	20	1900	外部よりの反対
Shalam	1884	N. Mex.	?	1901	場所不良、成員の貧弱
The Lord's Farm	1889	N. J.	16	—	—
Koreshans	1894	Fla.	60	—	—

Lystra	1899	Va.	25	—	—
Friedheim	1899	Va.	52	1900	性格軟弱、知性缺乏
Commonwealth of Israel	1899	Texas	42	—	—

この表によつて明かなやうに、宗教共産體運動の隆盛期は十九世紀の前半より半頃までである。この頃は、かかる宗教共産體のほか、オウエン主義者、フリーエ主義者等による經濟的共産體の設立運動も盛であつた。十九世紀初頭以來アメリカでは一方宗教上の復活運動 revivalism があり、これと共に他方社會主義の實驗熱が高まつたが、當時共産體を設立する試が、内的精神改造と外的經濟改造といふこの兩運動を結合する手段となつたのである。ここでは上記の宗教共産體のうち、重要なものについて説明する。

四

エフzata團 Ephrata Community これは二百年近くの間つづいた古い共産體として有名である。一七三二年にペンシルヴェニア州の現在のリーディング Reading 附近に設立され、二十世紀の初頃まで存続した。設立者はドイツのヴェルテムベルグ人コントラート・バイセル Conrad Beissel である。彼は Frau in der Wildnis に加入する目的で渡米したが、その頃この團體は既に解散してゐた。一時ドイツの再洗禮派の一分派に参加してゐたが、後に洞窟内で孤獨生活をおくつた。一七二八年に自己の宗教觀を述べる一書を公にしたところ、これに共鳴し彼と共に簡易生活をおくることを希望する同志が集まつてきたので、共同生活がはじまつた。しかしこれは中世の修道院生活に近い

北米の宗教共産體

8
 ものであつて、嚴密な意味の共產主義生活とはいへなかつた（當時この附近の人々もエフラタ團のことを修道院と呼んでゐた）。當初この成員は組合にその私有財産を引渡す義務がなかつたからである。しかしその後工業が発達してくると、生産手段の共有制をとり、共產村の性質を帯びるやうになつてきた。バイセルは一七八六年に死去したが、この村はその後も榮えた。その最盛期には成員三百人をこえた。その後、紛争や信仰熱の冷却のために成員は減少した。一九〇〇年には成員十七人（何れも結婚せず）となり、その財産を組合の形で所有した。一九〇七年には十一人となつたものの如く、當時になると、もはや共產村の實をそなへなくなつた。

五

シェーカー組合 Shakers Society シェーカーといふキリスト教の一宗派がつくるものであつて、エフラタ團を除き最古の宗教共產體の一といはれてゐる。この宗派の創始者はアン・リー Ann Lee といふ無學文盲の一英婦人である。彼女等は本國で迫害をうけ、一七七四年に少數の人々と共に渡米し、一七七六年にニューヨーク州のウォーターヴリートに定住した。一七八四年にマザー・アン・リー（教徒間では彼女を、かく稱する）は死亡し、ホイテーカー James Whitaker、ミーチャム Joseph Meacham、ライト Lucy Wright が相次いでその後繼者となつた。彼等の努力によつて仲間の數は増し、その經濟状態も向上した。この教徒には英獨米人ユダヤ人等種々のものがあつた。その最盛期は一八三五年乃至六〇年であり、その成員は一八三九年には五千人を超えたが、一八七四年には二千四百十五人、一八九〇年には千七百二十八人と漸次減少し、二十世紀の初期には五百人、一九三〇年代には二百人餘とな

つた。彼等は概して長命であるが、一時厳格な獨身主義をとつたので、人口は新加入者と養子によつて保たれ、増加は望み得なかつた。この成員は二十世紀の初期には十四の組合 (Societies) に分かれ、次の諸州に居住した。メイン、ニューハンプシャー、マサチューセッツ、コネクティカット、ニューヨーク、オハイオ、ケンタッキー、フロリダの諸州。その富は合計數百萬弗、所有地のみでも十萬エーカー以上に及んでゐる。

その教義は異色あるものである。その一特性は神を本来男女二元體と解釋することである。一八四二年―四三年の冬にこの組合に滞在した一外來者は、彼等の考へる天國について次のやうに傳へてゐる。イエスは長老長 Head Elder であり、アン・リーは長老婦長 Head Eldress である。天國はきはめて大規模なシェーカー社會である。その建物はすべて白色の大理石でつくられ、宏壯華麗をきはめる。そこには大果樹園があり各種の果實がみゆる。また美麗な型に設計された大花園もあり、その中を綺麗な河がながれてゐる。しかしこれ等すべては精神的のものである。この天國の外側には死者の靈があり、シェーカー教に改宗するまで、土地 (シェーカーの地獄) の上をさまよふ。天國から多くの靈が宣教の旅に派遣され、さまよへるものが信仰を告白して天國の社會に入るを許されるまで、彼等に説教をする。

また彼等によれば人類宗教の歴史はつぎの四期より成ると解せられる。(一) アダムよりノアにいたる時代、(二) それよりイエスの降臨までのユダヤ人の時代、(三) それよりアン・リーまでの時代、(四) それより今日までの時代であつて、今つくられつつあるものである。シェーカーはこれに屬する。また彼等は神靈界との交渉を信じ、踊によつて神を禮拜し、またこれによつて神と交通する。神意の啓示は身體を振動せしめて他人に傳達する。シェーカーと

稱せられるのはこれによる（最初はシェーキング・シェーカーといつた）。ノイスの前掲書に踊による禮拜や神との交通に關する方法、その實情についての訪問者の見聞記を掲げてゐる（ノイス前掲書五九七―六一二頁）。また結婚を卑め獨身主義をとる。なほシェーカーには次の三階級がある。（一）初心者（Novitate）これはシェーカー教會（公式の名稱は Millennial Church or United Society of Believers とし、一七八七年、即ちアン・リーが死して三年たつた時ニューヨーク州コロンビア縣の一村ニューレバノンで組織された）の受聖餐者であつて、組合の外部で生活する。（二）下級者（Juniors）組合員であつて試験期にあるものをいふ。組合内で生活する。この期間中は一時財産権をすてるが、いつでもこれより脱退し財産権を回復することができる。（三）上級者または聖職（Seniors or Church Orders）もつばらシェーカー教會の業務に服するものであつて、その財産権を全く拋棄する。

この社會の生活單位は家族 family である。一の家族を構成する人數は必ずしも一定してゐない。數人のものであれば、百人以上のものもある。男女及び子供より成る。彼等は獨身主義をとるため、その間に必ずしも親戚關係はなく他の社會の家族と内容性質を異にする。數家族（普通四家族）があつまつて一の組合 society をつくる。家族は一の大家屋に居住し、また共同の家計をいとなみ、普通一般に農業のほか若干の工業をも經營する。共產主義はその宗教制度の一部門をなし、すでにアン・リーがこれを主張してゐたが、これを實行しはじめたのは一七九七年第三次の指導者ミーチャムの時代である。しかしこの共產制の特性は「家族」内においてのみ行はれ、團體全體としての共產制はないのである。またすべての組合で共產制が實行されたわけではなかつた。その行政については、家族の靈的方面は長老（Elder）によつて、また世俗的方面は執事（Deacon）によつて管理される。行政の中心機關として僧

正職 (Ministry or Bishopric) がある。男女各二人の長老より成立し、執事や各産業部門の管理人を定める。その首長を指導者 leading elder or leading character といひ、僧正職の長老に空位ができたとき、これが任命を行ひ、また指導者の後継者を定める。またすべての行政部門を通じて女は男と平等の取扱をうける。

その日常生活は健實であり、また秩序正しいものである。朝五時に起床、夜九時に就床、食事は午前六時、正午、午後六時に共同食堂で行はれる。男女別々のテーブルに坐する。その食物の内容は單調であるが數量は豊富である。野菜と果實を好み肉食をしないものが多い。その食堂、寢室、店舖もきはめて清潔であつて、よく整頓されてゐる。集会所で讚美歌の合唱や、講話がしばしば行はれる。娯樂は少く、音楽は歓迎されないが、最近では野外スポーツ、例へば、遠足、クロケット、庭球等が行はれる。

六

ハーモニー組合 Harmony Society 公式の名稱はハーモニー組合であるが、この團體の建設者ラップ (George Rapp) の名をとり、ラピスト團 Rappist Community ともいふ。彼はヴェルテムベルグの一宗派 Separatists の中心人物であつたが、その特殊な信仰にたいして一般僧侶や政府が迫害を加へたので、一八〇三年に渡米し、ペンシルヴェニア州で五千エーカーの土地を買ひ、翌一八〇四年に六百人の信者とともに、ここに移住した。仲間のものの多くは農夫や工匠であつたが、相當高い教養あるものもあつた。ラップの養子ライヘルト Frederick Reichert の如きは、ふかい藝術上の素養と豊かな行政的才幹をそなへてゐたといはれてゐる。

北米の宗教共産體

この移住地はペンシルヴェニア州ライカミング縣 Lycoming County にあり、これをハーモニーと名づけ、ここで共産生活をはじめた。しかし共産主義は元來その宗教上の教義にはなかつた。これは移住後において開始され、彼等は財産を共有とし、また各人は特別の報酬をうけないで全體のために労働し、脱退に際して物的要求を出さぬことを申しあはせた。數年のうちに住家、教會、校舎、水車その他の工場をたて、また數百エーカーの土地を開拓し、かがやかしい前途が豫想されたが、一八一四年に場所がよくないといふので、土地及び附屬物を十萬弗で賣拂ひ、インディアナ州のポゼー縣 Posey County のウォーバンシエ Wabash 河畔で三萬エーカーの土地を買收し、ここに轉住した。ここでも榮え、ドイツからの來住者も増加し、一八二四年には人口一千人餘となつたが、マリア熱の流行のために同年にまたも轉住を企てた。その時たまたまロバート・オウエンが共産村設立のための候補地をさがしてゐるのをきき、彼にこの土地を十五萬弗で賣り、今度はペンシルヴェニア州のピッツバーグより數哩はなれたところの土地に移住し、この地をエコノミー Economy と名づけ、二十世紀の初期、共産制を中止するまでここに定住したのである。エコノミーでも、その經濟生活は急速に榮えたものの如く、一八二六年同村を訪問した Duke of Saxe Weimar の敘述にも、村の秩序がよく保たれてゐたこと、家屋が美しいこと、店や工場がよく整頓されてゐたこと、村人が幸福さうなことが明かにされてゐる。

ところが、この平和な村の生活にも一大異變がおこつた。一八三一年にマキシミアン・ドウ・レオン伯 Count Maximilian de Leon と自ら稱する風貌立派な男が、彼等と信仰を同うするものだといつて、數人の從者をつれてあらはれた。素朴な村人は、その素性をよく調査もしないで、参加せしめたが、彼は本名ミユラー Bernhard Müller

といふ山師であつた。間もなく村人を教唆して世俗的快樂追求の風を助成せしめ、次第にその仲間の數を増し、つひに、村はラップ派五百人と、所謂伯爵派二百五十人に分裂した。「伯爵派」は共有財産中よりその分前として十萬五千弗をうけ、彼を首長としてエコノミーより約十哩の地フィリップスブルグにうつり、新しい生活をはじめたが、彼は基金をもつてルイジアナ州レッド・リヴァー河畔アレキサンドリアに逃亡し、一八三三年コレラ病にかかつて死亡し、この一團は解散した。エコノミーの本部に残つたものは、その繁榮を回復し、南北戦争のはじまつたときには、現金五十萬弗を所有してゐた。この現金は戦争が終るまで、その庭の中に埋められたとのことである。

當初は結婚制を認めてゐたが、一八〇七年所謂「宗教復活」時代に、村の男女は従來の結婚の解消を申合せ、爾來獨身主義をとつてゐる。しかしながら彼等の生活は必ずしも禁欲的ではなかつた。美食を行ひ麥酒のみ、ことにその初期は、かなり明朗愉快な生活を送つたとのことである。一八四六年にラップは死亡し、この頃より人口が減少し、ことに獨身主義のために、この傾向が甚しくなつた。他方産業が發展してきたため、人力は、いよいよ不足し、その對策として外部の人々を賃銀労働者として雇入れ、一時はその數村人の十倍に達した。いふまでもなく、共產制は外來労働者には適用されなかつた。

かかる外來者との交渉がすすむにつれて、村の生活内容にも相當變化がおこり、村の若者の多くは經濟的繁榮を希望するやうになつた。ことにこの土地に石油がでることがわかつてから、この傾向は益々強くなつた。一部の村人は脱退し共有財産に關して自己の權利を主張し、しばしば訴訟を提起した。また會計簿記制度の不備のために經理方法も拙劣であり、一八九二年には百五十萬弗以上の負債があることが明かになり、次第に衰退期にはいつた。二十世紀

の初期には、この村の實質はリミテッド・パートナーシップに變形し、財産としては土地、石油井のほか、鑛道、銀行、鑛山の株式をもつてゐたが、一九〇四年に正式に解體し、殘餘財産は生存者の間に配分された。しかし彼等はなかく獨身主義をとり、また新しい人々の加入を認めなかつたために、人口は増加せず、仲間の數はきはめて少なかつた。

七

ゾーフ分離派組合 The Society of Separatists of Zoar これもヴァルテムベルグの Separatists によつてつくられた。彼等も迫害をうけたが、その主な理由は、國教に服従しないことよりは、むしろ軍務に服しないこと、公立學校に子弟を送らないことであつた。そのために或は罰金を課せられ或は禁錮の刑に處せられ、村から村へと流轉した。一八一七年にイギリスの富裕なクエーカーから資金上の援助をうけて、同志二百人がヒラデルフィアに渡航した。その中心人物はボイムラー Joseph Baunier (後に Bineler と綴る) であつた。彼はあまり教育はうけてゐなかつたが、有能の士であつて、この團體の靈界及び世俗界の指導者であつた。

オハイオ州のタスカラワラス縣 Tuscarawas County で數千ヘーカーの土地を買ひ、ここで新しい村をつくることとなり、これをゾーフと名づけた。その設立當初には共産制を實施する意圖はなかつた。土地はボイムラーの名義で、僅少の内金をはらつて買ったものであつて、各人にその小部分が割當てられ、ここで各自が勞働してその収入で購入代金を返済する約束であつた。しかし老人や病弱者は自分の勞働でこれを返済することが困難となり、また村の

結束生活がゆるむ虞もあつたので、十分に論議を重ねてから後、一八一九年四月に共産制を採用することとなつた。彼等は鍛冶屋、大工、指物師の店をつくり、また家畜を飼養し、また近所の農夫のために仕事をして金銭をかせいだ。また一八二七年にその土地を通過する運河がつくられることになつたが、彼等は二萬一千弗でその工事の一部を引受けた。これによつて、資金を得たほかに、またその生産物のための市場を確保することとなり、その經濟は榮え、間もなく土地の借金を返済し、さらに土地を買ひ足した。經濟の繁榮はポイムラーの力に負ふところが多い。當初十年餘の間は結婚を禁止してゐたが、後にこれを是認した。結婚制を認めるやうになつた事情として、老ポイムラーがその美しい侍女と戀愛に陥つたことをあげるものがある。この當否は別として、この解禁後もつとも早く結婚したものの一人が彼であつた。一八三二年にこの團體は The Society of Separatists of Noar といふ名稱でオハイオ州の法律の下に結社として認められることとなつた。組合の事務は三人の理事に委任された。理事が各産業の管理人をさだめ、また各人にその嗜好に應じて仕事を割當てた。五人の常設仲裁委員があつて、紛争を裁決した。また年年村民大會がひらかれ、成年の男女には各一票の權利が認められた。この結社が公認された直後の頃がこの團體の最盛期であつて、總員五百人をこえた。一八七四年頃になると、人口は三百人に減少してゐる。所有財産は百萬弗をこえた。

村が貧困な時代には、村人間にも調和があり平靜であつたが、富裕となるにつれて、村人の中には解散して財産を分配してほしいといふものがでてきた。一八五一年及び六二年には財産分割の訴訟がオハイオの法廷に提起されたが、却下されてゐる。しかしその後解散運動はやまず、一八九五年有力な一員レヴィ・バイムラー Levi Bimeler

(Joseph Brinleyの子孫)がこれに加はつたので、その勢力を増し、三年間の絶え間なき議論と紛争の後に、一八九八年つひに村民大會で解散を議決し、三人のものが清算事務にあつた。當時人口は二百二十二二人、全財産總高三十五萬弗、一人當分配高は千五百弗であつた。解散の頃にこの村を訪問したロンドン E. O. Rondall は、次のやうに述べてゐる。古くからの成員は過重な仕事を免除されて幸福であつたが、若いものは宗教上の情熱を失つてゐた。またゾーアでは約五十人の外部の労働者を使用してゐたが、これとの接觸のため、外部との交渉がさかんとになり、彼等は村の外で金儲をはじめた。そして不平等な労働にたいする平等の報酬といふ村の制度について批判的となつた。また共産制時代には食物や燃料を浪費することが多かつたが、この制度廢止後は村は榮えてきたと。

八

ベッセル團とオーロラ團 Bethel and Aurora Community ミソリト州シェルビー縣 Shelby County のベッセル村と、オレゴン州ポートランド附近のオーロラ村でつくられた共産體である。兩者の中心人物はドクター・カイル Dr. Keil である。彼は一八二二年プロシアに生まれ、渡米するまで仕立屋であつた。ニューヨークにしばらく滞在後、ピッツバーグにうつり、自ら醫師と稱して磁氣療法 magnetic cure を行ひ、人間の血液で書かれた不可思議な處方書を所有するといつた。三十歳の時に突然精神革命があり、宗教的となり、その書物を焼きメソヂスト教會に加入したが、間もなく脱退して獨自の一宗派をつくつた。これに素朴なドイツ人や所謂ペンシルヴェニア・ダッチが加入し、また一八四四年に所謂ドウ・レオン伯によつて捨てられたエコノミーの舊住民の一部も參加した。彼等が共

産村の設立を思ひたつたのは丁度その頃であつて、一八四四年この目的でミソリー州シェルビー縣で二千五百エーカーの土地を買つた。これがベッセルの濫觴である。後に千五百エーカーの土地を加へ、十年以内に人口六百五十人の小都會となつて榮えた。その産業は、農業のほかに、羊毛、製粉、製材等の工業であつた。

一八五五年にカイルはベッセルの住民約八十人とともに、安價にして肥沃な土地をさがしとめて太平洋沿岸地方を旅行し、翌年オレゴン州でオーロラ村をつくつた。この住民はその一部はベッセルより、一部は外部より集まり、間もなく四百人となつた。彼等はオレゴン州の數縣で一萬八千エーカーの土地を得て、ベッセルで行つた産業を經營するほかに、果實の栽培、乾燥をも行つた。

行政機構及びその生活様式は、ベッセル及びオーロラともに同一であつた。カイルが雙方の理事長であり、理事會がこれを補佐した。一八七二年までは、財産はすべてカイルの個人名義であつた。同年に成人の村人に分割する形式をとつたが、事實は從來通りの共產制が持續された。各村人は自由に仕事の選擇や變更が認められ、労働時間にも制限はなかつた。結婚はむしろ奨勵せられ、嚴格な家族生活がまもられた。各家族は別々の家屋に居住し、その生活に必要なだけの豚や牛が與へられ、パン粉その他の食料も必要な分量だけ村から供給された。また他の品物もすべて店舗に保藏され請求に應じて支給された。外部のものとの間の取引は別として、村と村人との間の取引には決算は行はれなかつた。彼等はきはめて平靜な生活をおくり、その間に紛争がなかつた。脱退を希望するものがあれば、これに現金または他の財産の形でその分前を與へ、自由に去らしめた。

多くの宗教共產體のうちで、この團體はある意味で結合力が最も弱いものであつた。これを結合したものは主とし

て創設者ドクター・カイル個人の力である。一八七七年彼が死亡すると間もなく、ベッセルは八〇年に、オーロラは一八一年に解散した。

九

オネイダ團 Oneida Community アメリカの宗教共産體の多くが、ドイツ、イギリス等のヨーロッパ人によつてつくられたのに反して、これはアメリカ人によつてつくられた。その中心人物はノイス John Humphrey Noyes であつて、アメリカ共産村に關する最初のまとまつた研究書「アメリカ社會主義史——一八七〇年」の著者である。

ノイスは一八一一年ヴァーモント州のブラッツルボロ Brattleboro. に生まれ、法律を研究したが、宗教研究に移り、後に Perfectionism と稱せられた教義をつくつた。一八三四年父の居住地ヴァーモント州プットネイ Putney に歸り、十二年間教義の研究及び宣傳を行つた。最初に信者となつたものは、彼の母と二人の姉妹と一人の兄弟であり、次が彼の妻及び兄弟姉妹の配偶者であつた。かういふ風にまづその信者となつたものは彼の近親であつた。一八四七年には信者の數四十人となつた。元來この運動はもづばら宗教的のものであつたが、後にフリーエ主義の出版物 Haringer その他同主義のものの影響をうけて、次第に共産主義にかたむき、一八四八年に彼を中心としてニューヨーク州のオネイダで共産村をつくることとなつた。

その加入者中大部分を占めるものは、ニューイングランドの農夫と工匠であつたが、醫師、辯護士、牧師、教員等もあり、教育の程度も平均以上であり、また相當經濟的にめぐまれた者が多かつた。當初數ヶ處に村をつくつたが、

一八五七年に全員はオネイダとコネクティカット州ウォーリングフォード Wallingford の二個處に集まつた。その人数は兩者を合して三百人をこえることはなかつた。このほかに外界の労働者を使用した。その行政は二十一人の常任委員によつて擔當され、また産業諸部門には四十八人の係長があつた。この組織は社會主義統制經濟に近く、複雑なものであつた。しかし民主主義的に比較的圓滑に運営されてゐた。

もつとも、その經濟生活は當初は必ずしも成功せず、相當の缺損を示したが、一八五七年より純益を生ずるやうになつた。この共產村の經濟的特性は、農業のほかに工業に重點をおいたことである。ここでは鋼鐵製鋼、旅行用袋、鞆、絹等の製造、果實の貯藏等が行はれ、その生産物は市場で好評を博し、これによつて經濟的にも一時成功したのである。他の共產體と異なり工業を重じたのはノイスの主張による。

彼は上述の著書の中で、從來のアソシエーション（共產團體の意）失敗の原因につき次のやうに述べてゐる。從來のアソシエーションでは、一にも土地、二にも土地、といつて、土地を偏愛したことが、その失敗の一大原因である。農業は資産をつくるのに最も困難なものであり、また労働の形態やその理論についても一定したものがないので、とかく紛争や不和の源となりやすい。加之、農業の場合には農地を得るために鐵道や市場より遠くはなれた荒野や邊陲の地に定住する必要がある。ところが元來社會主義といふものは文明の先端にたつべきものであるから、かかる村は經濟中心地の附近に設けられるべきであり、また一般改良進歩につき指導的地位にたつべきである。故に彼等は土地改良ではなく、むしろ製造工業に力を注ぐべきであつた。從來のアソシエーションの工場としては製材工場等があるのみ。「共產體の培養のためには、いかなる種類の工場とても農地よりは良いであらう」（ノイス前掲書一九頁）。

このほかにオネイダ共産體には種々の特性がある。ここでは、そのうち特に重要なもの、即ち宗教上の教義、結婚制度、相互批判制度のみについて述べる。このうち宗教論は、その出版物「The Berean」（一八四七年ブットネイで印刷）に、結婚制度はその社會理論を取扱ふ Bible communism（一八四八年オネイダで出版）中に述べられてゐるとのことであるが、ノイスの前掲書中にもその説明がある。相互批判制度についてはノードホフ前掲書中にはしい説明がある。ここでは、この二書及び既掲のヒルクイットの著書等により、これについて説明する。

まづ教義について述べる。その概要は次の通りである。クリストの第二の降臨はイエルサレムの破壊期に行はれた。當時に最初の復活と靈界の審判があつた。第二の、そして最終の復活及び審判が今やはじまらうとしてゐる。地上界の教會は天上界のこの王國を迎へようとし、その複寫、代理者とならうとしてゐる。地上と天上の教會を結ぶ要素はインスピレーション、即ち神と人の交通であり、またこれが神の王國をこの世につくる力である。福音は罪惡よりの完全な救濟を準備する。罪惡よりの救濟があらゆる他の改良の基礎である。神との交通は人々の心中の利己性を除去する。人々は遂には罪惡の完全な消滅、完全状態にまで進み得るものである。これがこの宗教的經驗の特性であつて、Perfectionists といふ名稱はここに由來する。一信者のこれに關する解釋をあげると次の通りである。「禁酒の原理がアルコール飲用を完全に抑止することであり、奴隸廢止の原理が人間束縛を即刻撤廢することであるやうに、完全主義の原理は、罪惡の即刻にして完全な廢止である。」と。

オナイダの社會制度のうち最も多く論議的となつたのは、その結婚制度である。彼等は普通の「單純結婚」simple marriage に反對して「複合結婚」complex marriage を主張し、これを實施した。これは一夫多妻、一妻多夫の制度を結合したものであり、共產制を物財のみに限らず、これを人體にまでも擴大するものであつて、かなり特色のある主張であるので、ここでは、ややくはしく説明する。この複合結婚制度はその所謂「社會理論」social theory の基調をなし、中核をなすものであつて、その「社會理論」の敘述（ノイス前掲書六二三—六三八頁）の大部分はこれにあてられてゐる。

ノイスはいふ「結婚は天國の制度ではない、これは共產制に代はらなければならぬ」。「天國では一人の男に一人の女の獨占的所有を指定する結婚制度は存在しない。この世で一對の男女 pairs に限られてゐる生活や利益の親密な結合が、天國では信者の全團體に擴大されてゐる。即ち複合結婚が單純結婚にかはる」(六二四頁)。性欲と獲得欲は自己中心主義 egoism といふ共通の源から派生する二の支流である。「人間の所有と事物の所有との間には本質上の相違はない。貨幣についての獨占を廢止したその同じ精神は、事情さへ十分にその活動を許すならば、婦人や子供に關する獨占をも廢止するであらう」(六二五頁)。我々の經驗によつても判るやうに、人間は一の結婚、一人の愛人のみで満足するものではない。「結婚の法律は刑罰のやうに作用する。(一)それは現實の又は心中の祕密の姦淫を助長する。(二)それは不似合の天性のものを結合し、(三)似合の天性のものを分離する。(四)それは性的欲望に、

僅少にしてまた單調な満足を與へるに過ぎないものであつて、かくして、貧困、趣味の貧弱化、物惜み、または嫉妬といふ自然的惡徳をつくる。(五)それは性的欲望が最強烈な丁度その時期に、これに満足を與へない。世間の慣習によると、結婚は普通平均して二十四歳の頃に行はれるが、發情期は十四歳にはじまる。それ故に、十年間、しかも一生涯中の最旺盛期に性的欲望は飢える。社會のこの法律は女性にたいして最も酷に影響する。といふのは、彼等はその結婚期をえらぶ機會が男性に比して少いからである」(六二八—六二九頁)。これが社會の病弊の源泉である。

アダムとイヴは、當初は、神にたいしても、相互の間でも、開放的であり恐怖心をもつてゐなかつた。罪をおかしてから後は、神をおそれ花園の樹間にかくれ、また相互間に羞恥心が生じ、衣服をまとふやうになつた。神よりの疎隔、相互間の疎隔、これが原罪の二大表現である。「故に人の罪を贖ひ、社會を再組織する試みにおいて、まづ第一になすべきは、神と調和することである。そして第二に兩性間の眞の結合をもたすことである」(六三〇頁)。フリーエ主義者が主張する産業制度の改良も、これを行つてから後はじめて實行されなければならぬ。性的關係といつても、これは性欲と生殖欲に分かれる。「性欲はエデンの園で發展した最初の社會的感情であり」、性欲が第一位のもの、最高尙なものであり、生殖及びこれに關する感情が第二位のものである。後者には妊娠、出産、育児、養育等の努力、費用がかかり、これは呪咀と考へられてゐる。故に性生活で、まづ第一に努むべきは性欲の機能の高揚である(六二九—六三三頁)。これに關してオネイダ理論の核心をなす男性自制論があるが、これについては、説明が省略されてゐる。また生殖を科學的基礎の上におくといふ立場から、若年者と老年者間の交渉を獎勵するが、これについても、ここでは何等論及するところがない。

性に關するかかる見解が、社會主義、經濟生活及び風俗習慣にたいしてもつ關係として、ノイスは次のやうに述べてゐる。これはアソシエーション(共產體)の生成を助長する。また、これは人々を結合する動機を提供するものであり、またアソシエーションで普通一般に妨害と考へられてゐるものを除去する効果がある。由來結婚といふことは人を最もよく結びつけるものであるが「各人がすべてのものと結婚する」複合結婚が行はれ、また愛が尊敬され開明されてゐる共產社會では、人々を結合する力は普通の結婚制度の場合に比して何倍か有力な筈である。またアソシエーションでは、絶えず會合や協同労働等があつて、人々が相接する機会が多いため、單純結婚の行はれる場合には、アソシエーションはむしろ不法戀愛の温床となり、羨視反目、不和分裂を誘發する危険が多い。複合結婚制はこの危険を除去するものである。また税關の線でかこまれた國家のアソシエーションも、とかく紛争が多い。自由通商制を實施すべきである(六三三—六三五頁)。かかる社會では生産力はまし、労働の必要は漸次減少する。また普通の他の社會では、分業によつて男女別々に仕事をするのにたいして、ここでは両性が協力して労働をするため、労働は魅力あるものとなり、スポーツとなるであらう(六三三—六三六頁)。

「いまや我々は死にたいする勝利への道を見出すことができる。神との調和は両性の調和のための道をひらく。兩性の調和は婦人を解放し、生々した社會への道をひらく。生々した社會は體力を増大し仕事を減少し労働を魅力あるものとし、かくて死の前提を除去するものである。我々がとり除くものは、まづ第一に罪惡、それから羞恥、それか

ら苦しき出産といふ女に對する呪咀、それから苦役といふ男に對する呪咀である。かくて我々は、まさしく、生命の樹木に到達する」(六三六頁)。

なほオネイダの主張は、ある意味で自由戀愛 free love であるが、他の場合のそれと異なることを指摘して、つぎのやうに述べる。ここで自由戀愛といふのは性的放埒ではなくて、結婚制度である。「結婚と放埒な性的結合との明かな、また根本的の相違は、つぎのやうに云ふことができるであらう。結婚は永久的結合であり、放埒は一時的浮氣に關するものである。結婚では財産の共有制が身體の共有制ともに行はれるが、放埒では愛は雇傭勞動となりこれに報酬が支拂はれる。結婚では男をして女に對する愛の行爲の結果につき責任をとらしめるが、放埒では男は女に母たる重荷を課し、時に恐らくはその名聲と健康を害し、そして責任をとらずに去る。結婚では子供の扶養と教育をはかるが、放埒では子供を厄介物として無視し運命に委ねる」(六三九頁)。オネイダでは、かかる意味の結婚制をとるものであり、全團體そのものが、世間一般のものとは異つた意味の「一家族」となるのである。「我々を結合する紐帯は、結婚のそれと同様に永久的にして神聖なものである。何となれば、それは我々の宗教であるから」(六三九―四〇頁)。

以上がノイスの「アメリカ社會主義史」にあらはれた結婚觀である。彼はその論據を聖書にもとめ、聖書中の句をたえず援用して敘述をすすめてゐるが、これについては、ここで引用をばびいた。

またノイスは一八七四年にその機關誌 Oneida Circular の中で次の如く述べてゐる。「現在若者にとつて重要なことは、かつてその祖先のものにとつて然りし如く、彼等が戀愛における自由を得る以前に、まづもつべきものは心の

神聖である。……彼等は共產主義者である以前に、まづ完全主義者でなければならぬ」(ノードホフ前掲書二七五頁)と。以上がオネイダ團の「社會理論」の概要である。その社會は複合結婚を樞軸として行く。この團體の場合に限らず一般宗教共產社會では、普通社會の家族制、家庭への顧慮が、所有欲や利己的邪惡の源と考へられ、共產制をやぶり、これと兩立しないものと考へられてゐる。これに關する對策として、他の多くの團體では獨身主義をとつたのであるが、オネイダでは逆の方向に進み複合結婚制をとり、團體全體を一個の家族化しようとしたのである。

以上が一般原理であるが、事實はどうであつたか。ノードホフの見聞記によると、オネイダ團では所謂結婚は男女の間で自由に行はれるのではなく、第三者が介在して相手の承認を得て行はれた。しかしながら複合結婚の實行は必ずしも圓滑に行はれず、相愛の男女が相手を獨占することを好む傾向があつた。彼等はこれを「罪ふかき利己性の證據」といつて、「相互批判」その他の方法で非難排撃につとめ、また若者と年長者との間の交渉を獎勵したのである。しかし一般に結婚生活は年長者が管理してをつたので、本人の意思に反することを強制されることはなかつた。また經濟その他の理由で、産兒制限をも實行したとのことである。

なほ、ここでは子供は、乳ばなれするまでは母の手許におくが、それから後は特別の扶養者により育てられた。外部よりの一訪問者の談によると、子供はみな健康で楽しさうであつたとのことである。また村内で優秀な學校教育が行はれ、また多くの若者は村内で必要な職業の研究のために、外界の大學、専門學校に派遣された。

十三

づぎに相互批判 mutual criticism について説明する。この制度はノイスが大學生時代につくつたといはれ、オネイダでは村の設立當初から行はれた。村人が村人全體またはその人を熟知する人々のうちから選ばれる委員によつて相互に缺點・非行につき公の席で批判する制度であつた。この批判は本人の要求によつて行はれたこともある。いはば刑罰制度にかはるものであつた。「批判治療」criticism cure とつて、これにより病氣の治療を行つたこともある。しかし、これによつて村人相互間に不和をかまさなかつたと云はれてゐる。現にオネイダの全歴史を通じて紛争はほとんどなく、いつも平和な生活がつづけられた。追放されたものも、ほとんどなかつた。相互批判に類似の制度としては、例へばアマナには年に一回、組合員全體につき行ふ信仰調査(アマナの人々はこれを「Intenschnung」といふ)があり、シェーカーでは、長老にたいする告白 confession の制度があつたが、これ等はオネイダの「相互批判」のやうには成功しなかつたとのことである。

なほこの團體では宣傳の目的で書物や定期刊行物を出版した。このうち有名なものが Oneida Circular といふ週刊誌である。この實費は一部二弗であつたが、その配賦について次のやうな獨特の方法をとつた。讀者を資力によつて三種に區分し、(一)二弗を支拂ふ能力のないものには無料とし、(二)二弗しか支拂へぬものには二弗で、(三)二弗以上を支拂ふ能力あるものには二弗以上で賣り、これによつて(一)の缺損の補填をした。「これが共產主義の法則である」といふ。

オネイダ團は三十年以上も存続した。しかしその結婚制に對する外部よりの、ことにニューヨークのプレビステリアン教會の牧師その他宗教界よりの反對論が強くなり、これを中止するのやむなきに至つた。またかかる制度は宗教

心が強くまた指導者の指揮によく服従するものの間でなければ永續は困難でもあつた。複合結婚制の中止と共に共産體も解體した。ノイスは數人の忠實な従者と共にカナダに移つたが、一八八六年に死亡した。彼は複合結婚中止後は獨身主義をとり、あくまでも單純結婚に反對した。オネイダに残つた人々は一八八〇年に Oneida Company, Limited. といふ株式會社にこれを改組した。ダグラス女史によると、この會社は現在（一九三七年）もなほ榮え、共産時代からの舊産業はすべて持續されてゐるとのことである。社員の特權は所有株式により代表されてゐる。わづかに、共同の文庫、讀書室、洗濯所、芝生地に、舊共産制時代の名残りをとどめるのみ。

十四

以上のほかにアメリカの宗教共産體として重要なものにアマナ組合 Ammana Society がある。これは十九世紀の半頃ドイツの Inspirationists によつてニューヨーク州のエリー縣 Erie County のヘーベン・ヘッツァー Eben-Ezer 組合といふ名の下で、ついでアイオワ州アイオワ縣でアマナ組合といふ名の下でつくられた。共産制をはじめたのは一八五〇年ヘーベン・ヘッツァー時代である。アマナ組合は一時は榮え、成功せる北米共産村の代表的のものとして最も有名であつたが、一八三二年に株式會社に改組した。これについての詳細は、既掲拙文で述べたから説明をばぶく。

以上が北米の宗教共産體中の主なものであるが、最後にその生活、ことにその經濟の側面について比較してみよう。彼等すべてに共通なことは、その加入者は加入の際に全財産を團體に交付することである。しかし一部の消費財に

ついでには私有は認められたことが多い。また、外部のものは別として、その成員の労働にたいしては報酬は支拂はれなかつた。ゾーアでは試験期のものになんたいしても支拂はれなかつた。しかし個々人の生活については、團體によつて終生保證せられ、老病者には十分の看護がなされた。消費財は、原則として身分にかかはらず、或は必要に応じて、或は平等原則にもとづいて配分された。その方法や内容は必ずしも同一ではなく、職業等に應じて多少の差別扱が行はれたこともある。衣服等も必要に應じて支給されることが多かつた。アマナ等では成員は村の店で一定金額まで掛買をすることとなつてゐたが、これも單に帳簿上の取引にとどまり、金錢を授受するのではなかつた。またすべての團體を通じて食事と衣服は概して單調であり奢侈をさけた。シェーカーやラピストでは服装も一定してゐた。住居や家計の形式は必ずしも同一ではなく、アマナ等では各家族は別々の家屋に住み別々に家計を營むが、食事は共同の大食堂でこれを行ひ、ゾーア、ベッセル、オーロラでは家族は別々に住み食事も別々に行つた。シェーカーやラピストでは獨身主義が嚴守され、一の大家屋内で生活し、その間の家計も家屋が單位となつてゐた。オネイダでは住居は分かれてゐたが、社會主義的な統一家計が行はれた。脱退者にたいしては、アマナ、ベッセル、オーロラのやうに財産を返還するものもあつたが、然らざるものもあり、ゾーアやエコノミーでは、脱退した舊成員の中には財産の返還や過去の仕事にたいする賞銀支拂の請求をなし、法廷で争ふものもあつた。しかし法廷は共産團體側を支持し彼等はやぶられた。

仕事は多くは長老その他の役員によつて割りあてられたが、時々轉換も認められた。當初宗教心の熾烈な間は彼等は熱心に働いた。指導者も自らすすんで筋肉労働に従事した。また労働自體に喜びをとまなはしめようとする努力も

あつた。また自足自給の經濟を目的とし、各種の必要産業の發達につとめたが、外界とは絶えず取引關係があり、機械類や農具等は外界より購入すること多く、また餘剰の物資は外界の市場へ賣りだされた。一時はシェーカーの農園の種子、アマナの羊毛製品等の如きは外界でも有名であつた。オネイダとエコノミーもこの點では成功した。ゾーア、ベッセル、オーロラ等では村内に店をひらき、近所に住む外界の人々に現金賣りをした。ゾーアの如きは外來者のために旅館を經營し、良質高級旅館といふ評が高かつた。またゾーアやアマナの如く、村人が近隣や外部の人々の依頼をうけて報酬をうけて仕事をしたり、またこれに土地を貸與したものもある。またほとんど、すべての團體では、その必要に應じ外部から賃銀労働者が雇入れられ、ことにオネイダとエコノミーでは、その工業のために賃銀労働者を利用することが、さかんであつた。これ等はいづれも、多かれ少かれ共產主義の原則をやぶるものである。

一般に北米宗教共產體は國家權力にたいしては、無抵抗主義をとり、國法に従ひ納税の義務をはたした。ただ戦時の兵役義務にたいしては、必ずしも従順ではなく、第一次大戦當時アマナやフーターの人々は、この點でかなり苦しんだのである（前掲拙稿九月號五五―五六頁参照）。その政治形態には、普通選舉、男女平等といふデモクラシー的側面もあつたが、宗教上の首長の獨裁といふ側面も強かつた。

十五

以上の説明によつて明かなやうに、宗教共產體の最盛期は十九世紀の前半であつた。これを支持したものは當初の狂信的宗教熱と、オウエン、フリーエ主義者の宣傳であつた。しかしながら十九世紀半頃以後になると漸くこの運動

も退潮期に入り、既存の團體は多くは解體または共產制の中止をしてゐる。解體または中止の原因としては、指導者の死亡、信仰の減退、團體員間の不和、經濟經營の拙劣、外部よりの壓迫等があげられてゐるが、そのうち最重要なものは、アメリカにおける宗教熱が冷却しはじめたこと、ヨーロッパで彼等に對する迫害がなくなり信教の自由が認められたこと、それから社會運動においても、ユートピア的實驗の域を脱して大衆政治運動の階段にはいつたこと等である。また當時は生産力の未發達、現實的經濟的地盤の未成熟の時代であつたので、この成功は不可能であつた。また世界的分業交換經濟が發達した十九世紀の近代文明社會で、その一角に特殊な小社會をつくることはきはめて困難でもあつた。現に大部分の共產體で外部より賃銀労働者を雇入れたといふことは、すでにその共產原則の一重要要素を破棄したものに外ならない。新開地開拓の初期とか（例へばアメリカ）、或は敵によつて攻圍された戰時（一五三四—三五年ウエストフアレンのミュンスターで再洗禮派によつてつくられた共產生活）等の特殊な場合に、成功の見込があるに過ぎない。

なほ注意すべきは、經濟共產體と宗教共產體の存續期を比較すると、經濟共產體の存續期が概して短く數年のものが多いのに反して、宗教共產體の場合は概して長く百年以上のものも罕ではないことである。この原因としてノードホフ等は、有力にして聰明な指導者があつたことをあげる。しかしシェーカーではアン・リーの没後もながく存続したといふ事實もあり、また他方經濟共產體では、多くの場合に、かかる指導者があつたにもかかわらず、失敗してゐる事實があるので、この説はとり得ない。またヒルキット等は、この原因として、つぎのことを指摘してゐる。(一) 宗教共產體では、ドイツの農夫等、その生活程度が比較的低く、また農業に經驗あるものが多かつたのに對して、經

濟共產體では、各種の理想家や生活程度の高いものが多く、農業の知識も不十分なものが多かつたこと、(二) 宗教
 共產體では、信仰生活を目的とし、共產主義の宣傳を目的としない。随つて共產原則を必ずしも固守しなかつた。外
 部より賃銀労働者を雇ひ入れる等の方法によつて、事實上共產主義原則を部分的にすてて、資本主義的營利企業に近
 づいたが、このことは、必ずしもその根本精神に反しなかつた(前掲書一二六頁)。この説は資本主義的制度が自然の法
 則であるといふ考を前提とするものであり、宗教共產體ではこの自然の流に逆らはなかつたために存續し、經濟共產
 體ではユートピア的理想に忠實であつたために早く解散せざるを得なかつたといふのである。思ふに、宗教共產體が
 永續した最重要な事由は次の點にあるであらう。ここではこの世の經濟生活の向上が窮極目的ではなく、宗教上の信
 仰による生活がその基調をなしてゐた。随つて共產生活を開始したために物的經濟生活が低下しても、宗教上の信仰
 が強烈なかぎりは必ずしも容易には瓦解しなかつたのである。このことは共產主義その他の新社會秩序の實現、存續
 には、經濟的外的地盤のほかに、人間精神といふ内的作用もまた有力な動因であることを物語る。經濟共產體でも、
 その間の結合強化の手段としてオウエン、フリーエ、カペー等の著作の讀書會、共產主義の詩の朗讀會等が絶えず行
 はれたのである。ノイス(前掲書六五五―六五七頁)のやうに、宗教を共產生活成功の不可欠の要素とするのは穩當を
 缺く解釋としても、しかしこれが最も有力な一要素であることは疑をいれぬ。